

源泉小学校

長谷川時雨

源泉小学校は大伝馬町おわたんまの裏にあつて、格子戸がはまつた普通の家造りで、上つて玄関、横に二階をもつた座敷と台所。たぶん台所と並んだ玄関の奥へ教場の平屋を建てましたのであろう。玄関の横の八畳には通りにむかつて窓があつた。ここの畳へ座る人種は我々と違つていた。特別の机が配置してあつて、手焙りてあぶが冬は各自めいめいについている。窓の下のところには、紙だとうに針山もおいてあつた。

お午ひる近くなると女中さんや小僧さんがお供ともをして、この八畳間の御門弟ごもんていたちがやつてくる。お嬢さんたちは、芝居の八百屋お七や油屋あぶらやお染だと思えばまあ間違

いはない、御大層なのは友禅ゆうぜんの座ぶとんを抱えさせてくる。お手習だけしているのもあれば、読よみものをしにくるのもある。お針仕事をしにくるのもある。息子さん連もまじっていたようだが、子供心にも、そんな青い、ウジヨウジヨしていた男の子は軽蔑けいべつしたからよく覚えていない。

校長秋山先生は、台所口の一枚の障子のきわに納まって、屏風びょうぶをたて、机をおき——机の上に孔雀くわじやくの羽根が一本突立っていた。火鉢の罐かんす子の湯をたぎらせお茶盆をひきよせて、出来上った人の格好を示した。山茶花さざんかの咲く冬のはじめごろなど、その室の炭におの匂い

が漂って、淡い日が蘭の鉢植にさして、白い障子に翼
の弱い蚊がブンブンいつているのを聞きながら、お清
書の直しに朱墨の赤丸が先生の手でつけられてゆくの
を見ていると、屏風の絵の寒山拾得とおんなじような
息吹いぶきをしているように、子供心にも老人の無為の楽境
を意識せずに感じていた。

さて教場の方は？ これは区役所の控所とも、授産
場とも、葬儀場ともいえる。後には六人一並びぐらい
の板張り机になったが、各自寺小屋式の机を持ってい
たころ、あたしが一年生時分は放り出しておく幼稚園
といつてよかった。しかし別段庭も空地あきちもないので

机場おさぎにおさまって遊んでいるのだが——まず硯箱すずりばこか
らしておもちや箱に転化させて、水入器みずいれにお花をさす。
硯箱一ぱいに千代紙をしいて、硝子ガラスを——ガラス屋が
そうはなかつたから、機械からくりの亀の子かめこやその他の玩具おもちゃの
箱の蓋ふたを集めて具合よく敷きこんで、金、銀の丈長たけながや、
金銀をあしらった赤や緑の中広はばひろの丈長を、種々の透し
を切り込んで屏風をこしらえて、姐あねさまを飾りはじめ
る。姐様は、半紙で小さな坊主づくりを作つて、千代
紙の着物をきせることもあるが、多くは、絵双紙店えぞうしやで
売っているのを切りぬく。自分ひとりではつまらない
が、向側となりも隣席もみんなしてするのだから面白い。さ

て、このアンポンタンがどんななりをしていたかという
と、黒毛じゆす縺子がはやりだした時分なので、加賀紋もん（赤
や、青や、金の色系で縫った紋）をつけた赤い裏の羽
織ラシヤ、黒羅紗のマントル（赤裏）を着て下駄は鈴のはいっ
たポツクリだ。

学校と露路あいを間にあして、これも元禄げんろく年間に建った表
町通りの紙店かみやの荷蔵がある。その裏の何かを取りは
らって空地が出来た時、どんなに児童たちはよろこん
だかshれない。向うの方に青い樹きが五、六本、教室の
窓の竹格子にむかって柘榴ざくろの花がまつかだつた。両側
が土蔵と土蔵で、突当りが塀よそで他家の庭木がこんもり

していた。

子供たちは鬼ごっこで無中になったが、なかで一番
大童おおわらわなのが校長秋山先生だった。先生は運動場を
もったことと、子供たちが悦よろこぶのとで欣よろこびが二倍で
あつたと見える。お附つきあ合いで困ったのが通いの先生
だった。この通いの先生は——初め来たのは若い人で、
この商業町に、というよりその頃はまだ法律家などは
珍めづらしかつたものと見えて、私がそういう家の子だと
知ると、特別にあつかいはしなかったが、少し待って
お出いでといつて、家の角まで送って来てくれた。何か家
のことでも聞いたりしたのかも知れないが覚えていな

い。ある日秋山先生が訪ねてきて、父と長く咄はなしていたが、それは私を送ってくれる先生が書生にしてくれといったのだとあとで聞いた。

その次に来た先生が、鬼ごっこで恐縮していた人で、このおとなしい先生を子供たちまでが、校長と一緒になつて気持ちでさいなんだ。士族上りの先生は弱げで、細い鼻のさきが、いつも冷たそうに赤ばんで、水鼻がうるんでいた。色白の女のように色の白い人で、お能役者のような摺足すりあしで歩いて、小倉こくらの袴はかまを引きずり、さほど年もとっていないのに背中を丸くしていた。よほど困窮ちゆうじきしていたと見えて、初めての日の中食ちゆうじきに、竹の

皮へ包んできた握飯おにぎりと梅干をつまんで食べたので侮おそつてしまったのだった。千住せんじゆから歩いて来るので、朝早くから出るのに、雨が降ると草鞋わらじを穿はいていた。秋山先生の弟子煩惱は大変なもので、ある折、市の聯合の大運動会が、桜の盛りの上野公園で催された。小さいながら代用学校と認められて参加を許されたのだから、先生は宇頂うちやうてん天なほど悦んで、一層空地の鬼ごっこや旗とりが奨励しょうれいされた。その日は区内の細かい学校が、かたまりになって、大きな公立小学校に対抗するので、源泉学校と染めた旗も出来上った。女の子は赤い緒おの草履ぞうり、男の子は白い緒の草履、お弁当はみんな揃えて

お寿司すしの折詰せりめを学校からあつらえ、お菓子や飲料のみもののこ
とまで世話人を定めたところが、あいにくその日は朝
から曇つて、八時ごろには地雨じあめになつてしまった。無
論子供たちも落胆して泣いたが、附添いや何かに慰め
られて帰ろうとした。すると先生は帰つてはいけな
いと叫び出した。といつて雨が降りやんだからとて、そ
の日運動会が催うされるはずはないし、もう何処どこの学
校でも子供は帰したからと、誰がいつても先生はきか
なかつた。それでも、一人二人と帰つてしまつて、教
場はガランとなる、其処そこ此処ここに赤や白の鼻緒の草履の
山があつて、おすしをもつていったものも、食べたも

のもあるので残りすくなくなって、残った手伝いが跡片附けをはじめても、先生は竹格子の窓に両手で顔をはさんだまま空を見詰めていた。さようならをしにゆくと、急に先生はたまらなくなつたように涙をこぼしだして激しいすすりなきになつた。

また、こんな事もあつた。丁字髷ちよんまげに結いつたお侍さむらいと

男の子のむきあつている絵の読本の時間だつた。なんでも大變りんしよく吝嗇りんしよくな武士で金銭ばかり数えている者で人に嘲あざけられていたが、ある事變が起つて、人を助けなければならぬ時、日頃愛する金銭を、すこしもかえりみなかつたので、前に罵ののしつた者どもも讃ほめたという

ところで質問した。割合金錢のことに興味を持つ——
店の買物の代価を、客から受取つて錢箱へ入れること
や、売上げの勘定に馴なれている子たちも多かつたので、
話はよくきいていたが、なぜ褒ほめたかという質問には
答えが満足でなかつた。先生はジリジリして褒めた
くつてたまらないのが褒められないので機嫌がわるく
なりかかつていた。先生の底の方に光る眼が私の上に
ギョロリときたが、暫しばらくたゆたつてから、

「ヤツちやん。」

と指さした。子供は率直だ、あたしの家ではあまり
金錢おかねの顔を見せない、あたしに金錢の貴さを知らせる

には無理だった。だからこの場合、あたしはその武士
がお金をならべて楽しむのは、あたしが姐様あねさまを飾るの
とおなじ位にしか見えなかった。だから皆が考えかね
ているのが不思議でかえって自分の考えが間違ってる
のかも知れないとさえおそれた。それでも言った、

「ふだんはお金が好きだが、人を助けるためには……」

そこだ！ と先生は飛上って卓つくえを打った。堪えか
ねるほど待兼ねた答を、予期しないアンポンタンから
得たので、先生の褒めかたは氣狂いじみてたほどだっ
た。

「傑えらい、傑えらい。その武士も傑えらいが、ヤツちゃんも負まけず

に傑いぞ。小錦こにしき関だ、やがて日ひの下開山したかいさんの小錦関だ。」

小錦という力士は後に横綱になったが、まだそうならないうち、新進気鋭で売出しかけてでもいたのであろう。そういつて褒めあげた末に、人間は大将を望んでやつと兵卒位にしか出世をしないものだという事や、恐らく〇〇先生も世が世であれば大名を志望こころざししてお出いでだったであろうがなぞと、呆れ顔あきに佇たたずんでいた、例の助教師の方へ嫌味をふりかけて、そのくせ人の好い笑顔をむけたりするのだった。

この教室の窓の格子のところへ、夏になるとお弁当

をみんなが並べておいた。運動場へは台所口から出るのだった。台所には、みんなが持つてきてある小さい土瓶どびんが、せとものやのように幾段にも釘くぎにかけてずらりと並んでいた。お午ひるになると御新造さんが、番茶を酌くみ入れてくれるのをみんながとりにゆくのだった。

ところがこの二、三日、午飯時おひるしきになると、きつと誰かしらのお弁当おべんとうが紛失なくなっている。今日も眼玉ひざしの廂ひざしとあだなされている、あたしの妹の分がなくなつた。

年子としこのようなあたしの妹は、一年ばかり間をおいて学校へ上つた。色の白い涼しい眼の子だわでしが出額わでしなので前髪を深くきつてさげていたので、眼玉の廂といわれ

ていた。男の子なんぞに負けないので憎まれっ子でもあつた。

お附きの女中のついてくる、八畳の間の方のお嬢さんは、下駄箱も特別なら、課業もおひるまえ午前ぎりでお迎えがくるので、お前もまだ年がゆかないからおひるまえ午前だけにしろと祖母にいわれたのにきかないで、お弁当にしてみらつたばかりの、初の日に奪とられたのだった。

おまつちゃんガラスは糸で編んだ網に入れてある、薄い硝子の金魚入れから水が洩もつて廻るように、丸い大きな眼に涙を一ぱい溜ためて堪こらえていた。奪られたお弁当箱は、祖母が根負けして買つてくれた朱塗しゆぬりの三ツ重ね

の、小さい丸いので、女中が持つてきて置いていたばかりのだった。中身には御飯の上に煎鶏卵いりたまごと海苔のりをかけて、隠元豆いんげんまめのおかずに、味噌漬がはいっている約束になっていたのだ。お弁当の袋をとるのが待遠しくつてならなかったのだった。となりにならないでいる女の子と、副食物おかずの分配わけつこの相談までしてあったのに——机の上には、新らしい小さな箸箱はしばこと茶呑茶碗ちやのみが出ている——

おまつちゃんは露路の方を睨ねめて泣きたいのを堪たえていた。大紙屋の白壁蔵の壁には大きな亀裂ひびあがあつて、反対の算盤屋そろばんやの奥蔵は黒壁で、隅の方のこんもりした

竹が冷^{すず}しく吹いている。石榴^{ざくろ}の花は赤く散りこぼれている。

女中がお弁当を持ってきた時に、

「御飯^{ごはん}が炊^たきたてですから、悪くならないように、風通しのよい場処へお置きなさいまし。」

と念をおしていった。それでおまっちゃんは竹の風の吹く、窓の敷居の上へのせておいたのだった。昨日奪^とられた子も、一昨日奪^{おと}られた子も、窓に近いお座^ざだった。

あたしは自分のお弁当をおまっちゃんに持っていつ

てやったが、おまつちゃんは見向きもしないで、窓に石盤せきばんをのせて、色石筆いろせきひつであねさまを絵かいていた。あたしも仕方なしに佇たたずんでいた。すると、窓に並んだ勝手口の方で、カタンと金属かなものの音がした。あたしも見た。おまつちゃんも見た。

露地の出口を乞食こじきのような老人としよりが出てゆく後姿が見える。その老人のさげてゆくものがカタンカタンと鳴る。

「鍋なべが——鍋が、鍋が。」

おまつちゃんは出来るだけの声をだした。

秋山先生は御飯後の苦いお茶を啜のんで、蘭らんの葉色を

眺め入っていた。

老人は溝板どぶいたをドタドタと駈出かけだした。鍋がガチャンとぶつかった音がした。台所からも御新造さんが怒鳴りだした。生徒たちもワーツと声をあげた。

秋山先生は袴はかまの股立ちももだをとつて飛出した。生徒もみんな加勢に飛出した。表通りからも、裏通りからも、番頭さんや小僧や、権助ごんすけさんまでが火事と間違えて駈けつけてきた。

泥棒はあわてて、向う裏へ逃げこんだが、それでも鍋はさげているので、逃げだした道筋には味噌汁がこぼれていた。老人としよりの泥棒はまごついて外後架そとこうかへ逃込んだ。

で、中から戸を押おさえていた。先生は持っている鞭むちで、戸をはたいて、

「出ぬか、出ぬか。」

と怒鳴った。見物の弥次馬やじうまは笑ったが、生徒たちは真面目まじめで先生のいう通りに怒鳴った。そうすると泥棒は体をかくしたまま、戸の上から鍋だけさしだした。先生はその手首をグイとひいたので、味噌汁おつゆを肩から浴びてしまったが、カツとした勢いで引出したので、汚い老人はブルブルふる顫えながら出てきた。

先生は勝誇しょうぼうつて揚々と、片っぼの手に鍋をさげ、片っぼの手で老人の肩をひつつかんで引摺ひきずった。大得意で

先生は大通りを人形町の交番へと、老人を引渡しにいった。生徒も弥次馬も後からぞろぞろとつづいた。

おまつちゃんもあたしもその時だけは先生を憎んだ。なにをきかれても答えなかった。

祖母は秋山先生一家を信頼しきっていた。時折訪問したが、孫たちの方へは目もかけずに帰った。台所口から家の使が、お盆へ乗せてふくさをかけたものを持って来ていたが、厳しくしてくれと頼んでいる様子だった。

おまつちゃんは強情だった。二人がお灸きゅうを据えら

れるとき——私の家では、一日に二度も三度もお灸の

出る時があつた。はなはだ甚しい時は、お灸を据えられて

後泣きをいつまでもしているからといってはまた据え

られた。灸は薬だからと、灸好きの祖母が許すので、

疔癩かんしゃくもちの母は、祖母へ対して不服な時も、父へ対し

て不満なときも、子供の皮膚を焼いた。瘦やせた女の股ひと

ほどもある腕をもっている体格の、腕力の強い母親

だった。ドサリと背中へ乗りかけられてしまうと、

跳返すことなどは出来なかつた。妹は秘蔵つ子だつた

が、それでも仕置の時だけは別で、強情な彼女は腕を

脱ぬいたりして、小伝馬町の骨接ほねつぎの百々瀬ももせへ連れてゆ

かれた。ある夏の夕方、彼女が麦藁帽むぎわらぼうをかぶって、
黄麻こうまの大がすりの維子かたびらを着て、浅黄ちりめんの兵児帯へこおび
をしめて、片腕ブラリとさせて俣夫しやふの松さんに連れら
れて百々瀬へ行く姿を、あたしは町の角で、夕霧ゆうもやにう
すれてゆくのを見送りながら大声で泣出したくなつた
のを覚えている。そんな風なので、お灸の時、あたし
は滝にうたれたように、全身の膏汗あぶらあせにへトへトになつ
てしまっているが、おまつちゃんは何処どこまでも反撥はんぱつし
た。お小用だというのが癖で、それで手をゆるめると
逃るので、出たければしてもよいというと、小さな彼
女はもうお灸の熱さも、乗っていられる苦しさも忘れ

て、出もしないお小用を絞りだそうと一生懸命になり、目的通りにやると、も一層激しいいきじお憤りを母から受けるのであった。

だから学校でもよく残された。あたしもおしょうばん相伴をさせられる。課業のあるうちは、黒板の下へお線香と茶碗おみずの水をもつてたたされるのだが、彼女は笑いながら水の中へ線香を突込んで火を消した。お残りは、広い教場へ二人だけ残されるのだ。机を積み重ねた上を渡ったりして二人は仲よく遊んだが、臆病おくびようだったあたしは、夕暮ちかくなると悲しくなりだした。あたしは別に残っていなくてもよいのだが、どうしても妹を

残して帰れないので——そんな時、意地悪く家からはお礼を言いに使いが来たりした。

もうよい頃と見ると、秋山先生が、まずあたしだけを部屋へよんで、お茶をくんでくれて、ぼた餅もちをとつてくれたりする。すると、きつとあたしが泣き出すので、それからおまっちゃんを連れにゆく。おまっちゃんにもおなじようにぼた餅をとつてやる。

暮れかかった町を、二人の幼い姉妹が連れだつて帰ると、後の方から離れて、秋山先生がそつと送つてついでに来てくださる——

秋山先生は女の子の仲間にいると女親のようなもの

をいった。ある春の日、山吹きのしん、をぬいて、紅べにで染めて根がけにかけてきた小娘こむすめが交つて、あたしのお座をとりまいていた。あたしはいつもの通り石盤へ人間を2の下へりの字をつけたような形に描いて、昨日の続きの出たらめ話をしているときだった。

「金坊きんぼう、沈丁花ちようじの油をつけてきたね。」

と通りがけに先生が言った。金坊とよばれたのは古帳面屋の娘で、清元きよもとをならっている子だった。ニコリと笑った、前髪から沈丁花の花をだして見せた。

この学校の向うに、後日ごにちあたしが生花いけばなを習いにいった娘の家で、針医さんがあつた。もすこしさきへゆく

と、堀ぎわに堀井戸があつて、門内に渡り廊下の長い橋のある馬込まごめさんという家があつたが、その女中がお竹大日如来だつたのだといつて、大伝馬町の神輿おみこしの祭礼おまつりの時、この井戸がよく飾りものに用いられたが、ある時は団七九郎兵衛の人形を飾り、ある時はその家にちなんだお竹大日如来がお米を磨といでいて、乞食こじきに自分の食をほどこしをしているのだつた。

その隣家となりに清元たけうの太夫たゆうとかいう瓢箪ひょうたんの紋ちようちんの提灯ちようちんをさげた駄菓子屋があつた。石筆や紙や学校用品を売つていたが、売手のおかみさんが上手なので、近いところよりも、生徒はそこに集まつた。おかみさんは学校

用品よりも、青竹の筒にはいった砂糖蜜入りのカンテンや、暑くなるとトコロテンの突いたのをお皿に盛つて買わせた。おかみさんはよく話した。清元のお師匠さんをして自分の旦那だんなが、非常に声がよかつたので仲間^{うた}にねたまれて、水銀をのまされたので、唄うたう方が出来なくなつたので、仕方なしに三味線の稽古けいこをしているのだと、芸人のかなしみを、子供が感じるようにしめじみというのだった。だから、品物を買つておくれといった。

そのすこしさきの町角に杯口屋ちよこやのおくんちゃんの家がある。お国くんちゃんはあたしとおみき徳久利とくくりのように、

長唄のおつきあい浚きらいにお師匠さんに連れてかれた少女ひとだから、そのうちに書かなければならない。

学校の一軒さきに大きな人力車宿くるまやどがあつて、お勘ちゃんという、色は黒いが瘦やせがたなキリリとした、きかない気の、少女こむすめでも大人のように気のきいた、あたしのために、あたしの家へよく忘れものや、言伝ことづけを言いにいってくれた娘があつたが、後に吉原で奴太夫やつこたゆうという名でつとめに出ているときかされたことがある。その手前に表通りの砂糖問屋の磨きあげた、黒塗りの窓のある住居蔵があつて、お糸さんという豊かに丸っこい娘さんの琴の音がよく聞えていたが、隣りに、と

てもみじめな乏^{ます}しい母子^{おやこ}二人の荒物屋があつて、小娘のおとめさんもお婆さん見たいにうつむいて、始終ふるえているように見えた人だった。

その斜^{すじむこ}向うに花屋があつた。剥身^{むきみ}のように幅の広がった顔と体の妹と姉とがいた。二人がいるうちは花屋の店もよけい賑^{にぎや}かに見えたが、馬喰^{ばくろちよう}町の郡代^{ぐんだい}の矢場女^{やばおんな}になつてしまった。

底本…「旧聞日本橋」 岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本…「旧聞日本橋」 岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力…門田裕志

校正…小林繁雄

2003年4月2日作成

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。